

10月14日(土) 16:00~17:30

ラウンドテーブル②

ニュー・マテリアリズムによる教育研究の可能性を探る(2):
音とともに変化する実践—研究

(104番教室)

企画者

楠見友輔 (信州大学)

提案者

遠山裕一郎 (長野県木曾養護学校)

市川友佳子 (東京藝術大学大学院)

近藤真子 (文教大学)

佐藤貴宣 (高知大学)

〈設定趣旨〉

本ラウンドテーブルでは、近年、国際的な社会科学研究で注目されている「ニュー・マテリアリズム」の観点から教育実践を計画・評価する方法について、参加者とともに議論を行う。ニュー・マテリアリズムの中心的な特徴は、物のエージェンシーを考慮することにある。伝統的に、教育実践では物は環境として人間の行為を制限したり方向づけたり促したりするものとして活用されてきた。または、物は教師や子どもが操作する教材・教具として活用されてきた。これらの視点においては、物は予め用途の決まった道具とみなされており、人間の行為は合目的なもののみとみなされる。しかし、物を道具とみる視点からは、人間の行為の中から、どのようにして目的から離れた結果が生じるのかを説明することができない。これに対して、ニュー・マテリアリズムは、物も予想外の出来事を生じさせる要因となり得る考えることで、活動の創造的側面を説明することを可能にする。このような理論は、授業の実践や研究に対する、伝統的な人間中心主義とは異なる視点をもたらす上で意義がある。

企画者は、2022年から「ニューマテリアリズムによる教育研究ワークショップ」を主催し、オンライン研究会において、ニュー・マテリアリズムに関する文献の講読と、会員による実践報告の検討を行っている。提案者は、研究会のメンバーである。本ラウンドテーブルでは、企画者と提案者が1つの知的障害特別支援学校において実施した音楽の授業を紹介し、提案者らがニューマテリアリズムの観点を用いてその授業を分析する。

企画者は『教育方法学研究』第46巻に「ニュー・マテリアリズムによる教育研究の可能性」を投稿し、本論文は日本教育方法学会の会員に広く読まれている。本ラウンドテーブルは、その論文の内容を実践に落とし込んで発展させることと、会員とニュー・マテリアリズムを用いた教育研究の可能性についての理解を深める上で意義がある。